

新聞で伝えよう！思い出の修学旅行

－ 相手・目的意識を重視した新聞を作成した学習活動 －

静岡県浜松市立豊岡小学校 教諭 菊地 寛
e-mail : hiroshikikuchi0203@yahoo.co.jp

キーワード：相手・目的意識、新聞作成ソフト、N I E学習、言語活動

1. はじめに

新学習指導要領総則では、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」とこと「言語活動の充実」について述べられている。

そこで、ICTを活用しながら総合的な学習での新聞作成を通して、思考力、判断力、表現力を養い、国語科を中心とした言語活動が生かせるように本実践を行った。

2. 授業の実践

2.1 学習計画

本実践は2学期に行ったが、1学期に国語科「ガイドブックをつくらう」の学習で、グループごとに学校についてガイドブックを作った。伝える相手はグループごとに考え、来校者や下級生に伝えようとガイドブックを作った。しかし、相手が何を知りたいのか十分に考えることができなかったため、うまく伝えることができなかったという思いが子どもたちの中にはあった。

そこで、本単元では伝える相手が何を知りたいのかということを考えて伝えることを意識させて、本実践に取り組んだ。

| 児童の学習活動 | 評価 | 時 |
|---|--------------------------------------|---|
| 1 修学旅行の振り返りをし、伝えたいという思いをもたせる。 | (調) 修学旅行のことを伝えたいという思いをもつことができたか。 | 2 |
| 2 「ガイドブックをつくらう」の振り返りをし、グループごとに記事の内容を考え、分冊をし、学習計画を立てる。 家 修学旅行で記事にしたいことを思い付くだけ書いていく。 | (調) 記事にしたいことを意識的に考え、グループの中で発表できたか。 | |
| 3 書く内容に合わせて、写真や資料などを選ぶ。 | (計・思) 写真を選択する際、理由を伝えることができたか。 | 1 |
| 4 一人一人が記事の下書きを手書きかパソコンで書く。 | (記) 自分の思いが家の人に伝わるように、記事を書くことができたか。 | 1 |
| 5 グループごとに読み合い、推敲をする。 | (評) お互いに良さを認め、直すべきところは指摘することができたか。 | 1 |
| 6 清書や編集を行う。 | (作) パソコンか手書きかを自分で選択し、清書を書くことができたか。 | 3 |
| 7 見てもらえる見出しを考えよう。 | (表) 伝えたい相手や読者であることを意識して記事を書くことができたか。 | 1 |
| 8 出来上がった新聞がどう伝わったか振り返ろう | (鑑) 人に伝える上で大切なことは何か考えることができたか。 | 1 |

図1 学習計画

2.2 相手意識・目的意識をもたせる

修学旅行の事前指導から、おこづかいや費用の面などから保護者に感謝する気持ちを育ててきた。また、修学旅行中に台風が大接近したこともあり、家族がとても心配していたことを子どもたち自身も分かっていた。そのため、修学旅行のことを伝える相手を話し合ったとき、子どもたちが「家族」と決めた。発達段階から考えも家族と会話が少なくなり始める頃でもあるので、家族での会話のきっかけになるという押さえもあった。

家族が何を知りたいのかを考えさせるところ、「台風接近中の活動の様子」、「友達と仲良くしていたのか」など家族の思いを十分想像して考えることができた。また、子どもたち自身もこの修学旅行を通して成長したことを家族へ伝えたいという強い思いもあった。

2.3 短い文でまとめる

新聞のまとめ方は、グループで1枚とし、その中で、一人一記事を担当することにした。修学旅行のまとめの意味も含めてグループで共同して仕上げることにした。そのため、一人あたりの記事の文字の量が少なくはなるが、一文を短くし言いたいことだけを絞って伝えることを重点に考えた。

そこで、言いたいことを短い文でまとめる学習をさせるために、本単元に入る前に夏休みの思い出を「ハガキ新聞」にまとめさせた。葉書サイズの紙に題名や見出しも付けて、夏休みの思い出を新聞にまとめるため、かなり書く文字数が制限される。一文を短くして書く内容を精選する必要がある。初めての経験で苦勞していたが、伝えたいことを一つに絞り込み、言葉を精選して「ハガキ新聞」を仕上げることができた。ここでの学習が、本実践で言葉を精選してまとめることに生かすことができた。また、本物の新聞を見せ、一文が短いことも確認にし、なるべく短い文でまとめることを確認した。

2.4 下書きと推敲

修学旅行の何を伝えたらよいかグループの中で十分に話し合いを行った。「協力したこと」、「樹海探検」など記事の内容を決め、それぞれ分担をした。書く内容をグループで相談してあるため、下書きメモはすぐ書くことができた。そのメモを基に各自で下書きをした。下書きは、「手書き」か「パソコン」にするかを子どもに選択させた。「手書き」が10人、「パソコン」が29人だった。その理由を聞いたところ、「手書き」を選択した子どもたちは、「書くことに慣れている」、「考えやすいため」と答えた。「パソコン」を選択した子どもたちは、「直しが簡単」、「清書もパソコンを使うから」と答えた。下書きからパソコンで行うのは初めてだったが、メモがしっかりしていることもあり、子どもたちは抵抗なく文章を考えながら入力することができてい



写真1 手書きによる下書き

た。手書きの子どもたちも、清書と同じ枠の原稿用紙を用意し下書きを書かせた。国語科での作文と同じ要領ですぐに下書きを仕上げることができた。

でき上がった下書きの推敲は、まず同じグループの中で付箋紙を使って行った。どのグループも同じ内容になってしまう可能性があったので、「自分たちの班らしさ」を新聞に入れるように投げ掛けた。そうしたところ、「すごいを他の表現に変えたい」という思いから、国語辞典で自分の気持ちに合った言葉を選んだり、比喩表現を使って自分たちらしさを表現しようとしたりと、言葉を大切にしようとするグループが多かった。また、同じグループだけの推敲では内容を十分に理解しているため、内容を知らない他グループとも交流し推敲をし合った。家族が知りたいことという視点で読み合い、「知りたい内容ではないのではないかと指摘したり、「〇〇さんらしい表現」と認めたりすることができた。

2. 5 パソコンでの入力

清書は、全員がパソコン入力を選択した。「全体の構成が分かりやすい」、「見た目がきれい」などの理由が多かった。入力には「新聞作成ソフト」を利用した。子どもたちにとってはワープロソフトとあまり変わらず、抵抗なく入力することができた。個人で入力したものをグループの新聞に貼り付ける方法で行った。この「新聞作成ソフト」を使用することで、見出しや写真も簡単に入れることができるため、本物と同じようなものを仕上げることができた。また、グループの共同で進めているため、分からないときはグループの中で助け合う姿も見られた。



写真2 パソコンで入力

伝える内容が修学旅行であり、伝える相手も保護者ということもあり、写真をたくさん見せたいと考える子どもが多かった。紙面には限界があるため、そこで、本実践ではQRコードを新聞に貼り付けることで、保護者が携帯電話で閲覧する可能性が高いと考えた。グループで選んだデジカメのデータをネット上にアップして、QRコードで閲覧できるようにした。

2. 6 保護者へ伝える

完成した新聞は、拡大印刷をして教室に掲示をし、だれもが読むことができるようにした。拡大された新聞は子どもたちにとってもかなりうれしそうで、休み時間には自分たちの新聞の周りに集まって読み合っていた。

でき上がった新聞を保護者に読んでもらうために、全員がグループの友達の家族に向けて手紙を書いた。自分の親ではないため、全員が丁寧に真剣に手紙を書いていた。保護者からは読んだ感想を手紙に書いてもらった。書いてもらう内容は、「何が伝わったのか」、「どこが成長したのか」という点について学級たよりでお願いをし、手紙を書いてもらった。子どもたちはうれしそうに、その手紙を読み、味わっていた。「協力する大切さが分かってよかった」、「台風の中、頑張っていたことを知って安心した」などの感想が多く、子どもたちが伝えたと思っていた内容が書かれていたため、子どもたち自身もとても喜んだ。そして、どうして伝わったのか確認をした。「伝える相手のことを考えたから」、「自分の思いを入れたから」、「言葉をしっかりと選んだから」とその理由を確信していた。



写真3 拡大印刷した新聞

3. 考察

I C Tを活用することで、より子どもの思いの具現が図られ、思考力や判断力、表現力も身に付くと考えられる。しかし、その前提として、相手意識、目的意識がしっかりとある必要があり、継続的に意識させていく必要がある。そして、一方的に伝えるのではなくどう相手を受け取ったのか反応を確認することで、何がよかったのかよくなったのか振り返ることができる。

また、思いを伝えるためには言葉が必要であり、日ごろからの国語科を中心とした言語活動を充実させることが重要である。